

ペン俳句会 句会報(三四七号)

令和五年八月三日(木)

兼題『朝顔』、席題『林』

夏休みですが句会を開催。出席者は十一名(投句十二名)。

宮原 凧

林道の奥へ奥へと蝉しぐれ

昨夜(よべ)の雨朝顔の紺極まりぬ

八月の車内放送黙禱す

江ノ電に乗りて一人の夏の海

地下道を抜けて猛暑に身を曝す

松田 一文字

緑蔭や石段急な摩崖仏

炎天や子いぬも木陰出たがらず

川沿ひの草に夏蝶群れゐたる

空缶とビン林立す盆休み

朝顔や小学校の廊下に絵

首藤 しずを

つかの間の生気輝き牽牛花

夏掛をかくも乱して乙女子よ

人通り絶えて真昼の百日紅

昼花火支度をいそぐ群屋台

松林見上げ食後の三尺寝

大津 そうかい

打水やハワイの旅は夢のまま

歓声や谷見下ろせば子のプール

朝日燦地にごきぶりの骸燦

朝顔や昨夜の深酒身に残る

汗拭ひ下る林道風無上

中村 晃也

朝ドラをみて朝顔に水を遣る

木漏れ日の続く林や夏落葉

朝顔の観察日記以下同文

切り口の直ぐに錆び色青林檎

湘南の海林立の浜日傘

森田 元斐

天空へ自力の挑み蔦葛

片陰へ詮なきもがき大暑かな

林間の古道に兆す秋の色

赤白の麦わら帽子草の海

朝顔へ通りがかりの品定め

内藤 まりこ

若竹のひときは伸びて光受く

玉虫の骸未だ燦梅雨の明け

朝顔に小さくおはよういざ往かん

静かなりブナの林の晩夏光

君臨す鉢に大きな蓮の花

高橋 由紀子

林間や蕎麦屋涼しき深大寺

朝顔市見むとて出掛く入谷かな

ほおずきや競ひ鳴らせる日は遠く

炎天をしゃきりと歩む黒紺

夕焼けを指す河鵜の首長し

新田 ゆふき

蝉絶叫体温超ゆる炎天下

星涼し林に降らす金剛石

朝顔や置屋芸者の水茶漬け

朝顔のもうひと花や格子垣

青柿の落ちて剥けたる浅緑

浜口 須美子

黒扇子止めて小さき悪だくみ

真昼間の花火や赤き金宝樹

朝顔の蔓が手探る己が道

江田島や背筋伸びたる松林

昼揺蕩い真夜の金魚は水撥ねる

安藤 晃二

林立の風車の男鹿や湾の夏

牽牛花の夜の湿気にぼんやりと

ガラス越し鈴懸青葉カップ置く

秋田杉真澄の道の夏旺ん

夕暮れやテラスに届くハイボール

西川 知世

媼ひとり住まふ噴井の音育て

あぢさゐの毬や雨呼ぶ雲の端に

日盛りや絵硝子の窓嵌め殺し

観音の肩膝を撫で梅雨の寺

次回は令和五年九月七日(木)

兼題は、季語「立秋」(宮原風さん出題)、席題は西川知世さん出題の「鳴」です。

(お詫び) 7月度句会報で、兼題の朝顔を夏の季語としましたが、秋の季語の誤りです。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

立秋 秋立つ・秋来る・秋に入る・今朝の秋・今日の秋

今年の八月はとんでもなく暑い。いつまで夏は続くのか：大型台風が早々と来て日本近辺から動かない。これは秋本番の気もする。俳句は陰暦の季語を使う文芸であるから、立秋は八月七日ころに当り、秋の句となる。年々、陰暦と陽暦の体感が開いていることに戸惑いをおぼえる。しかし、日本の季節感の原点として、気象学の体感の差を乗り越え、切り離しつつ、鑑賞、作句とともに力を試されているような気がするの、私だけではないかもしれない。古今集の「秋立つ日詠める 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚か

れある 藤原敏行」に先人も苦労していることに力を得て、挑戦したい。ちいさい秋見つけた、である。

そよりとせいで秋たつ事かいの 鬼貫

立秋や時なし大根また蒔かん 高浜虚子

秋立つや川瀬にまぢる風の音 飯田蛇笏

かはたれの人影に秋立ちにけり 角川源義

起き出れば秋立つ山の八方に 松本たかし

秋立つやこつこつと越す跨線橋 大野林火

立秋の櫂高枝にへっせ死す 森 澄雄

秋来ると町屋根越しの白マスト 野澤節子

何もなき郵便受けや秋立ちぬ 池田澄子

立秋の水もみくちやに手を洗ふ 高橋富久江

秋立つや帽子を仕舞ふ丸い箱 近藤さちこ